

## 京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題 (一)

日高, 愛子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10329>

---

出版情報 : 文献探究. 45, pp.22-49, 2007-03-30. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（一）

日高 愛子

## 一 解題

飛鳥井家は、雅経（嘉応二年（一一七〇）—承久三年（一一二二））が飛鳥井を号して後、和歌・蹴鞠両道の家として近世まで続いた。この飛鳥井家による『古今和歌集』の講釈の聞書として名高いものに『古今榮雅抄』がある。『古今榮雅抄』は、その書名にも見るように「榮雅」こと飛鳥井雅親（応永二四年（一四一七）—延徳二年（一四九〇））が足利義政（永享八年（一四三六）—延徳二年（一四九〇））に講釈を行った際の聞書である。しかしながら、この原聞書は一向一揆により一度焼失しており、後に『古今榮雅抄』として世に流布した書が、永禄四年（一五六二）二月の奥書によって僅かに知られる「玉信」なる七十歳余りの老人の手によって復原されたものであることは、既に片桐洋一氏（『中世古今集注釈書解題 四』赤尾照文堂、昭和五九年）によって指摘される通りである。したがって、『古今榮雅抄』と称する書は、諸本の引用や「玉信」自らが良鎮より伝授を受ける筈であった一条兼良の説など他説を多く交えており、飛鳥井家説を記した原聞書とは若干様相を異にするものとなっているに違いない。

この『古今榮雅抄』の他に、榮雅の講釈を聞書したものとしては、現在四種の本が確認されている。新井榮蔵氏「榮雅の〈古今集注〉をめぐって—古今集注釈史論—」（『国語と国文学』五二号、昭和五〇年九月）に依れば、以下の四本である。

- ①今治市河野信一記念文化館蔵本（以下、「河野本」と略称する。）  
写本一冊  
（外題）「蓮心院殿説古今集註」
- ②京都大学蔵本（以下、「朱書本」と略称する。）  
刊本『両度聞書』六卷八冊の余白・行間にある書入  
（外題）「古今和歌集抄」（内題）「古今和歌集両度聞書」
- ③広島大学蔵本（以下、「為和本」と略称する。）  
写本二卷二冊の本文部分  
（外題）「古今聞書上（下） 為和卿筆」——（墨消・判読不能）
- ④京都府立総合資料館蔵本（以下、「京府本」と略称する。）  
写本一冊存（卷十一（恋歌二）以下のみ残存）  
（外題）「古今集 合本／恋哥 全」

これら四本については、新井榮藏・泉紀子<sup>註(1)</sup>両氏により既に基礎的研究がなされているが、書誌的事項と系統本としての位置付けについて、私見を加えて以下に記すことにする。

①河野本は、表紙左肩に打付け書で「蓮心院殿説古今集註」とあるが、この「蓮心院」とは榮雅の法号である。また、一丁表には「青谿／書屋」（朱文方印 縦一・一糶×横一・一糶）の印がある。この①河野本と同系統（仮にA系統と称する）と考えられるのが、②朱書本の寛永一五（一六三八）年版『両度聞書』の余白及び行間に施された朱・墨筆による書入れであり、①河野本と本文・識語共にほぼ一致する。ただし、①河野本の識語にも「右以或本書之、不審之事等雖有数多、且任本書之、此本又早卒写之、無正跡者也、重得証本而、可校正而已」とあるように、この二本は、純粹な榮雅講釈の聞書とはいえず、飛鳥井家説とは異なる他説も加筆するなど、原聞書の改編本といえる。

一方、③為和本と④京府本は、右の二本とは若干ながら系統を異にする伝本である。④京府本は『古今和歌集』巻一から巻十までが欠けており、その全貌は定かではないが、残存する本文を見る限り③為和本とほぼ一致することから、これと同系統（仮にB系統と称する）とみなして間違いなからう。

③為和本については、外題に「古今聞書上（下） 為和卿筆」（墨消）とあり、これを納める箱蓋中央にも「古今聞書／歌道心得書 二部冷泉為和卿筆」とあるが、この本が冷泉為和（文明一八年（一四八六）—天文一八（一五四九））の手になるとは考えにくい。この本には他本に見られぬ書入れ（本文と同筆）が非常に多く、巻末に「御来迎院殿御注分 法名宗清」として、宗清、すなわち為和の父、冷泉為広（宝徳二年（一四五〇）—大永六年（一五二六））の注積分が付

されるなど、冷泉家説も加筆されている。また、箱蓋の裏面には、「此書は此持主橘正濟東京のちまたにて得る処なり かゝる珍宝の市中に出ることは過にし戊辰の年世間瓦解したるによりてなるへし 此より古筆了仲翁に見せければこは鳥丸大納言光広卿の真跡也といふ」と墨書されている。「東京」とあることから「過ぎにし戊辰の年世間瓦解したる」とは、明治維新をさすと思われる。したがって、この箱書きもその時期のものとして推測されるわけであるが、果たしてこの本が鳥丸光広の手になるか否かは疑わしい。いずれにせよ、この本に見られる膨大な書入れは、飛鳥井家説に基づくものからは離れており、本文と書入れとの区別も判然としない。このような点から考えるに、③為和本は榮雅の講釈の原聞書とはいささか様相を異にするものである。

私に仮に称したA系統については、片桐氏によって①河野本の翻刻がなされているが、このA系統とB系統とは僅かながら本文に違いがある。例えば、A系統が歌注のない歌についてはその多くを省略するのに対し、B系統では歌注のないものについても歌を記すなどしている。また、A系統とB系統では異なる歌注なども見られる。しかし、A系統は先に述べたように原聞書の改編本としての要素が多々あること、そしてB系統に位置付けられる③為和本についても、書入れなどではあるものの、より原聞書の面影を残すのは④京府本だといえるのである。

本稿では、榮雅、ひいては飛鳥井家の古今集注の具体相を知る手掛かりの一つとして、この④京府本（残存する巻十一〜二十）を翻刻する。④京府本の詳細な書誌は以下の通りである。

所蔵者 京都府立総合資料館

分類番号 特／831／36

外題 表紙左肩に「古今集合本／恋哥全」と打付け書。

内題 古今和歌集

表紙 白茶色流水文様

卷冊数 一冊存（『古今和歌集』巻十一～巻二十）

書型 大本（縦二六・〇糎×横二〇・九糎）

装丁 袋綴

料紙 楮紙

遊紙 前一紙、後一紙あり。

丁数 墨付一〇〇丁

書入れ 主に歌人名を朱書で記す。その他墨書による書入れもある。

貼紙

二六丁表に一紙、二六丁と二七丁の間に一紙。

蔵書印 「京都／図書／館印」

（朱文方印 縦六・四糎×横六・四糎）

「信古堂」（白文長方印 縦二・四糎×横〇・九糎）

「凌雲亭」（白文長方印 縦二・五糎×横〇・九糎）

注記 卷末に「古今和歌集序 紀淑望」及び、和歌作者一覽

を付す。



▲表紙

一丁表（内題）▼



▲九一丁表（識語）

## 二 翻刻

凡例

- 一、本文の表記については、用字等なるべく原文のままとしたが、旧字体については新字体に直した。
- 一、朱書については、書体をゴシック体で示した。
- 一、字の左側に読みなど付されているものについては、原稿の都合上右側の（ ）内に示した。
- 一、貼り紙や挟まれた紙に書かれたものについては、    内に示した。
- 一、冒頭に『新編国歌大観』に依る歌番号を付した。尚、詞書きに対応する注に関しては、その歌番号を「」で示し、歌注と判別できるようにした。
- 一、系統の異なるA系統本との異同を記載した。その際、用字の違い等の細かな異同については言及せず、注目すべき異同がある場合にのみ、傍線（該当箇所が無いものについては\*）を付し、直後に【校異】として示した。この場合のA系統本の本文は、今治市河野信一記念文化蔵本（片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題 四』に依る）をもって代表させた。これは、同じくA系統本の京都大学蔵本（朱書本）が刊本『両度聞書』への書入れであることを考慮したためである。
- 一、今治市河野信一記念文化蔵本の本文にない歌注等については、その歌番号に■をかけて示した。
- 一、紙面の都合上、今号は恋歌一から恋歌四までの翻刻を掲載する。残る翻刻は、次号以降に順次掲載することにした。

古今和歌集  
恋哥

読人しらす

469

一ほとゝきすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな  
 序哥也つゝけやう玄妙と也あやめを上の菖蒲草をうけてあやめ  
 とよます但あやめと綾目とよむへき歎哥の心は綾は織る物の惣  
 名なれば織目のわけをも恋の乱ミしらぬと也文なけれども織物  
 は紋といへはほれくしくて物の分なき也恋ほれたる心也

素性法師

470 一をとにのみきくのしらつゆよるはおきてひるは思にあへすけぬへし

義なしよるはおきてを起也此心にても可用又置也何も所好ニよるへしなすらへ哥の類也

【校異】此心にても可用—\*

紀貫之

471 一吉野河いは浪たかく行水のはやくそ人を思そめてし  
 義なし吉野河早也はやくそ人をとほとくより人を思心也

【校異】思—おもひそめたる

藤原勝臣

472 一白浪のあとなきかたに行船も風そたよりのしるへなりける  
 舟の方にては一行の風ニ任て行多しらぬとなり恋の方にては風  
 の便也便の人ニつけてわさとならすいひよりたき心也  
ナカクチハヒ  
 媒

の事も初尋縁恋の哥の躰也

【校異】一行—一片 初尋縁恋—初尋恋

在原元方

473 一とは山をとにきつゝ相坂の関のこなたに年をふる哉

あふと云名のある関のこなたとはあはぬ心也としをふるとは逢事なくてなからへたる心也

同

474 一立帰あはれとそ思よそにても人に心をたきつしら浪

たちかへりは我身を立かへりてみれば我ながら身を哀と思也よそなからたに人に心をつくして身をくたくと也人に心をくとは隔心にあらす心かけたたる也人をおもふ心中をよくもしらぬをあはれと思心也。(\*)

【校異】\*—或抄云、歌の心、よそながらにてさぞとだにしられぬことをなげけ

ど、をしかへし思へば、それもあはれに覚ゆ。さるべき契ありてやなど、おもひ入たるよしにや。人に心を興津しらなみとは、心かけたると也。此集のおくに、など世中の玉だすきなると云も、中くにつけたるをくるとよめる也

つらゆき

475 一世中はかくこそありけれ吹風のめにみぬ人も恋しかりける

義なし人間万事如此ありと也

[476] 一右近の馬場の日をりの日左近といふと云事もあり業平は左近中

将右近少将<sup>ウ</sup>てありし也古も種々説あり朱雀院のぬり籠<sup>ニ</sup>かんや紙にて業平自筆<sup>ニ</sup>書たる本<sup>ニ</sup>右近馬場の日とはかりありひをりの日とはなし女のかほのとあるを二条の後の御事とありひをりの日の事種々説あり不用<sup>ニ</sup>只まで<sup>(ツカイカキヨロニル)</sup>対<sup>カチ</sup>の人裾と云装束のしりを引る也それをきの一字を略してひをりと云也四日は左近五日は右近の馬場也大和物語異本の伊勢物語<sup>ニ</sup>みすもあらずの返哥<sup>ニ</sup>見

みも見すもたれとしりてかこひらるゝおほつかなみのけふのなめやと返しありて其後又しるしらぬなにかあやなくの返し又あるとあり大和物<sup>ニ</sup>しるしらぬの哥はなくてみも見すもの返しはかりあり俊頼此しるしらぬの返しあはぬよしありしと也さらにあはずといひかたしと也

【校異】此右近を左近と云ともあり

在原業平朝臣

476 一みすもあらず見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやなかめくら

さん

義なし

返し よみ人しらす

477 一しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思のみそしるへ成けれ

義なし

鹿嶋大明神春日一躰之御事也

[478] 一かすかのまつりにまかれりける時とは鹿嶋<sup>カシマ</sup>より神護景雲<sup>年号也</sup>年中<sup>ニ</sup>大

和へやうかうの始より今<sup>ニ</sup>絶すある祭也その勅使<sup>ニ</sup>撰家の御人も立給ふなり忠岑<sup>マユト</sup>は舞人にて随也勅使の前に時の花をかさして随也

【校異】かすかのまつりにまかれりける時とは—かすがまつり、此春日祭は

絶す—絶せぬ ある祭—祭

みふのたゝみね

478 一春日野の雪まをわけておひいてくる草のはつかにみえしきみ<sup>ツ</sup>はも

義なし草のはつかとははつかにそとみえたる心なり君はもとは君は也きてもいかになと言をのこしたる哥の躰なり

[479] 一花つみの事前にも此類あり

つらゆき

479 一山さくら霞のまよりほのかにもみてし人こそ恋しかりけれ

義なし

もとかた

480 一たよりもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

何の便をもしらすはぬ心をつくすは我なからあやしきと也

【校異】便を―便宜

凡河内みつね

481 一はつかりのはつかにこゑをきよしよりなからにのみ物を思かな

初鴈にあらずはつかいはん為也例の序哥也

つらゆき

482 一あふ事は雲井はるかになる神のをとにきよつゝ恋わたるかな

是も序哥の心也逢事よせて也逢事なくは命もなからへかたきと也

也

よみ人しらす

483 一かたいとをこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん

同

484 一ゆふくれは雲のはたてに物そ思あまつそらなる人をこふとて

義なし雲のあひたにすちくのあるを云也日の光のあるを雲へ

たてのさすとみゆる也 (\* )

【校異】義なし雲のあひたにすちくのあるを云也日の光のあるを雲へたてのさ

すとみゆる也―雲の旗手とは、日の人ぬる山に光のすちく立のぼりた

るやうにみゆる雲の旗の手のさすに似たるを云也 \*―又、蜘蛛の手の由

に書たるものもあれど、あまつ空なるなどよめる歌、空ならで疑べきに

非也。重也。蜘蛛とよみたるも雲のはたてなれど、蜘蛛によそへてよむ、な

かるべき事にあらず

485 一かりこもの思ひみたれて我こふといもしるらめや人しつけす

は

同

かりこもは思みたれていはんため也いもと云事夫婦成てこそ

あるへき今は思をかくるによりていもと云也しるらめやとは

やはしると云心也万葉茹こもを乱るよとよむ也

同

486 一つれもなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとは忍はん

義なし露の置を我おくとぬとは寝るによせてよむ也なすらへ

哥の類也

同

487 一ちはやふるかもものやしろのゆふたすきひとひも君をかけぬ日はな

し

序哥也神の社とある本あり不用ゆふたすきはまさきのかつらな

とを冠かくる事ありたすきと云事かくると云付ての言也

同

488 一我こひはむなしきそらにみちぬらし思やれともゆく方もなし

義なし

同

489 一するかなるたこのうら波たえぬ日はあれともきみをこひぬ日はな

し

義なし風あらくて波たかき海也越中ふせの郡あるたこは湖

也藤をよむ名所也わかめかるとは丹後あり丹後とよむ也伊勢

国の海をは伊勢海と云也

490 一ゆふつく夜さすやをかへの松のはのいつともわかぬこひもするかな  
同

異義なし松の葉の時をわかぬことくに我こひもあるとなり

491 一あし引の山下みつの木かくれてたきつ心をせきそかねつる  
同

義なし瀧つ心はたきにあらすたきつたる心也

492 一吉野河いはきりとおしゆく水のをとにはたちし恋はしぬとも  
同

義なし

493 一たきつせのなかにもよとはありてふをなとわか恋のふちせともなき  
同

いかなるたきる瀧にも淀のあるにわか心のしつ心なきと也

【校異】たきる瀧―瀧つ

494 一山たかみ下ゆく水のしたにのみなかれてこひむこひはしぬとも  
同

義なし

495 一思いつるときはの山のいはつゝしいはねはこそあれ恋しき物を  
同

義なし序哥也

【校異】序哥也―\*

496 一ひとしれす思へはくるし紅のす多つむ花の色にいてなん  
同

色にあまたあり紅はさし出てけんちよなる色にてある也又心の

臟の色赤也末つむ花は出羽のあき花<sub>ニ</sub>作紅の事也貫之の哥さけはつむ物と思しくれなぬは涙のみする色にそありける

497 一秋のゝのおはなにましりさく花の色にやこひんあふよしをなみ  
同

義なしりうたんの花などの事なるへしと也色にや恋んとは色にいてゝやこひんと也

498 一わかそのゝむめのほつえに鶯のねに鳴ぬへき恋もするかな  
同

序哥也梅の末の枝也つほめるを云とあり万葉<sub>ニ</sub>柳にもほつえと也つほめるにあらす

【校異】ほつえと書て、そばにはつえとつけたる本にて、ほつえ、はつえ同事。

梅の末の枝也。又、ほつえ、つほめる枝をいふと云説もありと申されき。万葉集に、柳にもほそ枝とよみたり。それも同事歟。十二月によめる歌也

499 一あしひきの山郭公わかことやきみにこひつゝいねかてにする  
同

義なしことやは如也

【校異】ことやは如也―\*

500 一夏なれはやとにふするかやり火のいつまでわか身下もえをせん  
同

義なし蚊遣火は夏なれはする物也我こひはさていつをかきりと  
もなきと也

501 一恋せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそ成にけらしも  
同

伊物にはらふるまゝになと云所の心にて神はうけすその所を心



得へし

同

502 一あはれてふことたになくは何をかは恋のみたれのつかねをにせん  
我をあはれやといふほどの事さへなくては我恋のみたれたるを  
はなにとせんと也つかねをと東の字也乱たる物思ゆひ合する  
物也

同

503 一おもふにはしのふることそまけにける色にはいてしと思し物を  
義なし此上句伊物<sub>ニ</sub>あり色にはいてしときりてと思し物をとよ  
む也

同

504 一我恋を人しるらめやしきたへの枕のみこそしらはしるらめ  
人はえしらしと也枕の恋を知と云事連綿事也

同

505 一あさちふのをのゝしのはらしのふとも人しるらめやいふ人なしに  
序哥也義なし此人しるらめやは人やしらうするとうたかふ心也

同

506 一人しれぬ思やなそとあしかきのまちかけれとも逢よしのなき  
是も逢よしのなきといはん為也蘆にてしたる墻の間<sub>ニ</sub>ちかきに  
は兆す蘆の節たかくてをしよせてゆへともまはらなる事を云也  
古き尺<sub>ニ</sub>兆す

同

507 一おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくどくる下ひも  
なにともあれ人にあふましきと也どくる下ひもとは人かこふれ  
は紐かどくると也義なし

508 一いて我を人なとかめそおほ船のゆたのたゆたに物思ころそ

義なし猶与ヤスラウ也ためらふ也万葉哥<sub>ニ</sub> 我心ゆたのたゆたに  
うきぬなはへにもおきにもよりやかねまし（\*）

【校異】猶与ヤスラウ也―猶豫、タチモトフル也 \*―此歌の心もうきぬなは浪にゆ  
られてたゆたふ心と聞ゆ。あるひは舟に入水をか手の手ゆきと云説あ  
れども、それは不用。只兎角たゆたひて物おもふよしとぞ聞侍し

同

509 一伊勢のうみに釣するあまのうけなれや心ひとつをさためかねつる  
義なし序哥也

【校異】序哥也―\*

同

510 一いせの海にあまのつりなは打はへてくるしとのみや思わたらむ  
義なしたくなわと一本也

同

511 一涙河なになかみをたつねけん物思時の我身也けり  
義なし

同

512 一たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひはあはさらめや  
も  
義なしこひをしこひはとよむ也

【校異】こひをしこひはとよむ也―\*

513 一あさなくたつかはきりの空にのみうきて思のある世なりけり  
序哥也義なし

514 一 わすらるゝ時しなればあしたつの思みたれてねをのみそなく  
義なしあしたつ蘆の中ニあればあしたつとあし鴨同前也

515 一 唐衣日もゆふくれになる時は返々そ人は恋しき  
義なし返々は衣の縁言也夜は衣を着かゆる事あり

516 一 よろゝに枕さためん方もなしにかにねしよかゆめにみえけん  
義なし

517 一 こひしきに命をかふる物ならはしにはやすくそあるへかりける  
義なししにはやすくとは死する事は安くあるへきとなり

518 一 一人の身もならはし物をあはすしていさ心む恋やしぬると  
義なし

519 一 しのふれはくるしき物を人しれす思ふてふ事誰かかたらん  
義なし思ふてふ事とおもひといふ事也

520 一 こむ世にもはや成なゝんめのまへにつれなき人を昔と思はん  
来世ニなれと也果ミケヒをみせんと也つれなき人を昔とおもはん  
はつらき人を昔人ニなして見むとなり

【校異】つれなき人を昔とおもはんとは一\*

521 一 つれもなき人をこふとて山ひこのこたへするまでなけきつるかな  
義なし

522 一 ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふ成けり  
義なしかすかくとは畫の事也經ニ云 亦 如 畫 水  
亦ヤクニヨクワスイ 隨タシタツテカクシタカイアウ 書 隨 合とあり

523 一 人をおもふ心は我にあらねはや身のまとふたにしられさるらん  
義なし

524 一 おもひやるさかひはるかに成やする迷夢ちにあふ人のなき  
義なしまとふ夢ちにあふ人もなきはいかひ心也俊頼の日くるれ  
はあふ人もなしまささちるもこれよりいてたる哥也

525 一 夢のうちにあひみむことをたのみつゝくらせるよるはねん方もな  
し

義なしねんかたもなしはいかにねてか夢にみゆると思心也

【校異】ねんかたもなしは一\*

526 一 こひしねとするわさならしむはたまのよるはすからに夢にみえつ  
むはたまの事万葉ニはぬは玉とあり天徳の哥合ニむは玉の夜の夢  
たにまさしくは我思ふことを人に見せはやとありしをぬは玉と  
こそあるへけれとありてかきあやまりとて負ニなりしと也但ぬ

は玉むは玉同事也と心得へしむは玉をつねに用へへき也よる  
はすからとは夜もすから也

527 一涙河枕なかるゝうきねには夢もさたかにみえずそ有ける  
義なし

528 一恋すればわか身はかけとなりけりさりとて人にそはぬ物ゆへ  
義なしやせたるをは影のやう<sup>ニ</sup>なると云也影形とならば思人<sup>ニ</sup>そ  
ふにてもなしと也

【校異】影形とならば思人<sup>ニ</sup>そふにてもなしと也―\*

529 一かゝり火にあらぬ我身のなそもかく涙の河にうきてもゆらん  
義なし 錠<sup>カヤリ</sup> 本字也 篝是は少心かはる歟

530 一篝火の影となる身のわひしきは流てしたにもゆる也けり  
義なし

531 一はやきせにみるめおひせはわか袖の涙の川にうへまし物を  
義なし みるはふかき所におふる也 涙川のみるめなきよしなり

532 一おきへにもよらぬ玉もの浪のうへにみたれてのみや恋わかりなん  
おきへ思ふ人を沖にしてその辺へもよらぬと也 おきへとよむ也  
いそへ川へ山へには相違すおきへとよむ也

533 一あしかものさはくいりえの白浪のしらすや人をかくこひんとは

義なし

534 一ひとしれぬおもひをつねにするかなるふしの山こそわか身成けれ  
義なし

535 一とふ鳥のこゑもきこえぬおく山のふるき心を人はしるらん  
同 序哥也

536 一あふさかのゆふつけとりもわかことく人や恋しきねのみなくらん  
同

537 一相坂の関になるゝいはし水いはて心におもひこそすれ  
同 いはてといはん為也

【校異】いはてといはん為也―\*

538 一うき草のうへはしけれる淵なれやふかき心をしる人のなき  
同

539 一打わひてよはゝむこゑに山ひこのこたへぬ山はあらしと思  
同

540 一心かへする物にもかゝたこひはくるしき物と人にしらせん  
物にもかは物にもかな也 かた恋<sup>カタク</sup> 獨<sup>コト</sup> 恋也

541 一よそにしてこふれはくるしいれひものおなし心にいさむすひてん  
同

入ひもとはくひかみのある装束<sub>ニ</sub>めひもをひもとてありとうは  
うむすひのやうなる物也是を結に同心<sub>ニ</sub>まはして結は同心に契  
らんと也

542 一春たてはきゆるこほりのゝこりなく君の心はわれにとけなん  
義なしとけなんと念願也

【校異】なんーむ

543 一あけたてはせみのおりはへなきくらしよるは蛍のもえこそわたれ  
同 明れは也

544 一夏虫の身をいたつらになす事もひとつ思によりてなりけり  
同 蟬をも蛍をも云也是は火蛾<sub>カ</sub>とて火とり虫也青蛾あをき虫也  
一思は初一会也

【校異】会一念

545 一ゆふされはいとゝひかたきわか袖に秋のつゆさへをきそはりつゝ  
夕されはとは夕なれはと也そはりつゝそふたる也秋の感也

546 一いつとても恋しからすはあらねとも秋のゆふへはあやしかりけり  
義なし秋感なり

547 一秋のたのほにこそ人をこひさらめなどか心にわすれしもせん  
ほとはあらはれて也しやうたいに恋たる也まほとまをとの事也  
引哥俊成卿千載にみなれ木の見なれそなれてふす昔のまをなら

すとも逢よしもかな也

548 一秋のたのほのうへをてらすいなつまの光のまにも我やわするゝ  
義なし

549 一人めもる我かはあやな花すゝきなとかほに出て恋すしもあらん  
同 あやなはあらあやかしと云也我と我を不審也

550 一あは雪のたまればかてにくたけつゝわか物思のしけきころ哉  
義なしかてはたまりかたしと也かへりかても同心也たまりかた  
き也(＊)

【校異】＊一或抄云、かてにとは、たまればかつくくだけつゝ云心也。雪のた  
まるとみればかつくくほろくくとくづるをくだけつゝとは云也

551 一おく山のすかのねのしのきふる雪のけぬとかいはんこひのしけき  
に

しのき<sub>シノキ</sub>凌<sub>レウ</sub>世俗<sub>セウキ</sub>山の高をしのきて凌<sub>レウ</sub>は曆也とてふるゝ也<sub>ヨカス</sub>侵も  
ふるゝ心也すかのねは菅根也

【校異】すかのねはー＊

第十二 恋哥二

小野小町

552 一思つゝぬれはや人のみえつらむ夢としりせはさめさらましを  
義なし

553 一うたゝねにこひしき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき  
同

554 一いとせめて恋しき時はむはたまの夜の衣をかへしてそきる  
同 人を夢ニみんとて衣をかへす事常の事也古哥に袖をかへし  
てともあり

素性法師

555 一秋風の身にさむければつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに  
同 獨寝の感なり

[556] 一しもついても寺とは下御霊也シモコレウつはやすめ詞也姉小路イマヤ西洞院にも  
ありと也此事書の末に人のわさしけるとは法会などの事也真せい

法師とある彼は山の法師也いへりけり言コトとは法文也法華經五百  
弟子品ニフカクナイヘリウムケホウシユ不覺內衣裏有無価宝珠の言はと也此人因明法文と云物を  
空に書し人也名聖也

あへのきよゆきの朝臣

556 一つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

義なし

返し

こまち

557 一をろかなる涙そゝてにたまはなす我はせきあへすたきつ瀬なれば  
よのつね思こそ涙は玉共なれ我は涙のたきのことくになると也

【校異】涙の―\*

藤原としゆき朝臣

558 一こひわひて打ぬるなかに行かよふ夢のたゝちはうつゝならなん

義なし夢のたゝち直道也

559 一すみの江の岸による浪よるさへや夢の通路人めよくらん  
同 序哥也夢のおとろくかうつゝに人目をよくる如くにあるとなり

をのゝよしき

560 一わか恋はみやまかくれの草なれやしけさまされとしる人のなき  
義なし

紀とものり

561 一夜ぬのまもはかなくみゆる夏虫に迷まされる恋もするかな  
義なし蛍など也蛍はよひのま也我は終夜く迷と也

同

562 一夕されはほたるよりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき  
義なしけにはスケレダリケニ勝 異万葉

同

563 一さゝのはにをくしもよりもひとりぬるわか衣手そさえまさりける  
義なし

同

564 一わかやとのきくのかきねにをくしもの梢かへりてそ恋しかりける  
義なし

同

565 一河のせになひく玉藻のみかくれて人にしられぬ恋もするかな  
義なしみかくれては水ニかくるゝ也玉くしの葉にみかくれて柳  
のはにかくるゝ也水なけれども云也(\*)

【校異】柳―柳 \*―玉ぐしの葉のうたはみへかくれて也

566 一かきくらしふるしら雲のしたきえに消て物思ころにも有かな  
同  
義なし序哥也

567 一君こふる涙のところにみちぬれば身をつくしとそ我は成ける  
藤原おきかせ  
同  
義なし

568 一しぬる命いきもやすると心見に玉のをはかりあはむといは南  
同  
義なし玉のをはかりはその事也

【校異】玉のをはかりはその事也—\*

569 一わひぬればしゐてわすれんと思へとも夢といふ物そ人たのめなる  
同  
義なし人たのめなるとは人のたのみになるかと也

570 一わりなくもねてもさめても恋しきか心をいつちやらは忘ん  
よみ人しらす  
同  
義なし起臥動静忘ぬ也

【校異】臥—居

571 一恋しきにわひてたましゐまとひなはむなしきからの名にや残らん  
同  
むなしきからは死人也

【校異】死人—死骸

572 一君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし  
きのつらゆき  
同  
胸の火を涙の消と也

573 一世とゝもになかれてそ行涙河冬もこほらぬみなわ也けり  
同  
同  
みなわは水の淡也

574 一夢ちにも露やをく覽よもすからかよへる袖のひちてかはかぬ  
同  
同  
素性法師

575 一はかなくて夢にも人をみつるよはあしたのどこそおきうかりける  
同  
切なる心也

ふちはらのたゝふさ

576 一いつはりの涙なりせはから衣しのひに袖はしほらさらまし  
偽の涙平仲か事の類ニ非す偽に恋しきといはゝなにしに忍て袖  
をしほるへきなみたをかくすより真実ニおもふと也

大江千里

577 一ねになきてひちにしかともはるさめにぬれにし袖とゝはゝこたへ  
ん  
義なし

としゆき朝臣

578 一わかことく物やかなしき郭公時そともなくよたゝなくらむ  
同  
よたゝは夜ひとよ也

つらゆき

579 一さ月山こすゑをたかみほとゝきすなくねそらなる恋もするかな  
たゝたかきいはん為也をのか五月なれば惣して余情有五月山撰  
州の名所とも

凡河内みつね

580 一秋きりのはるゝ時なき心にはたちの空もおもほえなくに

義なし

清原ふかやふ

581 一虫のこと声にたてゝはなかねとて涙のみこそしたになかるれ

同 虫のことは如也

【校異】虫のことは如也―\*

よみ人しらす

582 一秋なれば山とよむまてなくしかに我おとらめやひとりぬるよは

同 山とよむはおとるかす心也

つらゆき

583 一秋のゝにみたれてさける花の色のちくさに物を思ころかな

ちくさに物をは種々<sup>ニ</sup>物思也

みつね

584 一ひとりして物をおもへは秋のよのいなはのそよといふ人のなき

義なしそよとはされはよと答也

ふかやふ

585 一人を思心はかりにあらねとも雲ぬにのみもなきわたるかな

同 雲ぬは禁中の事<sup>ニ</sup>非すうはの空也

たゝみね

586 一秋かせにかきなす琴のこゑにさへはかなく人の恋しかるらん

かきなすは琴をかきならす也秋のしらへは平調也万葉<sup>ニ</sup>時もの打なすつゝみこゑきけは時にも成ぬ君にあはんかもうちなすはうちならず也時守の事禁中<sup>ニ</sup>一時<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>申事あり乞巧<sup>ニ</sup>奠の時子一丑二など云也昔は一剋<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>申し也

つらゆき

587 一まこまるよとの沢水雨ふれはつねよりことにまさる我こひ

序哥也義なし

同

588 一こえぬまはよしのゝ山の桜花人つてにのみきゝわたるかな

同 事書<sup>ニ</sup>みゆる

【校異】事書<sup>ニ</sup>みゆる―\*

[589] 一やよひ許に物のたうひけるとは物の給ひける也せうそすとは消

息<sup>ソコ</sup>いきとをりをけしやすむる也

【校異】やよひ許<sup>ニ</sup>事書 せうそすとは―\*

589 一露ならぬ心を花にをきそめて風ふくことに物思そつく

同 義なし

590 一わか恋にくらふの山のさくら花まなくちるともかすはまさらし

くらふ山は恋にくらへたる也

坂上これのり

591 一冬河のうへはこほれるわれなれやしたになかれて恋わたるらん

むねをかのおほより

592 一たきつせにねさしとゝめぬうき草のうきたる恋も我はするかな

同 義なし

たゝみね

593 一よぬ<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>にぬきてわかぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

同 同ものり

同ものり

同ものり

同ものり

かけては心をかけて也かけて我ぬるは衣架也ひるの衣を夜はか  
くる也

594 一あつまちのさやのなか山中くになにしか人を思そめけん  
同 義なしさやの中山逢州也古哥ニ日数行草の枕をかそふれは露を  
きそふるさ夜の中山とあり定家卿少年の時さ夜と詠俊成卿云ッ  
夜の用なくはさやこそとありしと也

595 一しきたへの枕のしたに海はあれと人をみるめはおひすそ有ける  
同 義なし

596 一年をへてきえぬ思はありなからよるのたもとは猶こほりけり  
同 おもひを火ニ也

597 一わか恋はしらぬ山ちにあらなくに迷心そわひしかりける  
同 つらゆき

598 一紅のふりいてつゝなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ  
同 くれなゐは血の涙也ふりいては紅する時あり紅涙の事宝篋印  
経ニ仏血の涙して衆生を悲給ふ也色まさるは紅ニ非ず涙の色也

【校異】涙―涙の事  
同

599 一白玉とみえし涙も年ふれはからくれなゐにうつろひにけり  
同 我涙の不変なる白玉とみえつるか今はそめぬるはかり也と也切  
なる心也

【校異】也―成

600 一夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬへらなり  
みつね  
同 義なし

601 一風ふけは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなきゝみか心か  
同 同 しゃうへんにたへたるなど云類也絶頂絶妙通用也  
たゝみね

602 一月影に我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとやみん  
同 義なし

ふかやふ

603 一こひしなはたか名はたゝし世中のつねなき物といひはなすとも  
そなたの名の立へきと也我は世間の無常といひなすともと也  
(\*)

【校異】\*―そなたゆへに人のいはんと也。人の名はたゝじと也

つらゆき

604 一つのくにのなにはのあしのめもはるにしけき我恋人しるらめや  
同 義なしめもはるははるかに也又春の事も有也

【校異】有―通

同

605 一手もふれて月日へにけるしらま弓おきふしよるはいこそねられね  
いこそねられねは寝事也いきたなきと云も寝きたなき也手も  
ふれぬはあはぬ心もおきふし弓もくせ出来也

同

606 一人しれぬ思ひのみこそわひしけれわか歎をは我のみそしる



義なし

らしと也

とものり

607 一事にいてゝいはぬ斗そみなせ川したにかよひて恋しき物を  
義なし水なき瀬と云心也水無瀬河と書によりて也

第十三 恋三

みつね

608 一君をのみおもひねにねし夢なればわか心からみつる成けり

たゝみね

609 一のちにもまさりておしくある物はみはてぬ夢のさむる也けり

はるみちのつらき

610 一梓弓ひけはもとすゑわか方によるこそまされ恋の心は

みつね

611 一我こひはゆくゑもしらすはてもなしあふをかきりと思はかりそ

同

612 一我のみそかなしかりける彦ほしもあはてすくせる年しなけれは  
以上五首義なし

ふかやふ

613 一今はゝや恋しなましをあひみんとたのめし事を命成ける

たのめし事とは少頃事也

【校異】たのめし事とは少頃事也—\*

みつね

614 一たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

こりぬ心はそなたにそ御しりあらんとなり

とものり

615 一のちやはなにそは露のあた物をあふにししかへはおしからなくに  
なにそは命はなならずと也御説也あふにかへは命もおしか

【616】

一やよひのついたりちよりしのひに人にものらいひてとは物らはたゝ  
物いふ也むかしの言也教長卿説道風むすめの方へいまゆふさり  
まいりこんくはしき事らまのあたりに申さうするとありそほふり  
是非大雨

【校異】やよひのついたりちよりしのひに人に—\* 事ら—ことぐ

在原業平朝臣

616 一たきもせずねもせてよるをあかしては春の物とてなかくらしつ

なかくは長雨也三日して過をは霖と云也

としゆきの朝臣

617 一つれくのなかくにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし

是雨の方を兼て也徒然トセンともつれくともつくくとも同心也

なりひらの朝臣

618 一あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるるときかはたのまん

義なし返しにおもしろしと也

よみ人しらす

619 一よるへなみ身をこそ遠くへたてつれ心は君かゝけとなりనికి

よるへなみはよるへなき也波をそへて也思人によるへく事はな  
けれど心をは影のことくにそへてやると也 (\* )

【校異】\*—又、別抄に云、よるべとは、たとへば立よりのむ縁などあるあた

りを云也。無縁にさしはなれたるをよるべなしとは云也。此事只よるべ

と云こと葉にて歌にもよみ詞にもかけば、昔の人はうたがひ思事もなく  
云伝ふるを、近世に物のよししらずふるき事を見ざとらぬものゝ源氏物  
語に加茂祭によるべの水とよみたるは、社頭に神水とて瓶に入たる水也  
など自由に言出したるは、徒ごと也。同物語の傍の巻くをだに見ざり  
ける、いふかひなき事也。後撰歌、滋幹少将、なるとよりさしいだされ  
し舟よりも我ぞよるべはなき心ちする

同

620 一いたつらにゆきてはきぬる物ゆへにみまほしさにいさなはれつ

義なしいさなはれつは誘引ユウイン

【校異】いさなはれつは―\*

同

621 一あはぬよのふるしら雪とつもりなは我さへともに消ぬへき物を

義なし右の事書例の事也

【校異】右の事書例に事也―\*

なりひらの朝臣

622 一秋のゝに篠わけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりぬる

義なしあさの袖朝の袖なり

【校異】あさの袖朝の袖なり―\*

小野小町

623 一みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆく  
くる

義なし我みさまのわろきをしらてと也あしたゆくゝるは足たゆ  
く来也

源宗于朝臣

624 一あはすしてこよひ明なは春の日のなかくや人をつらしと思はん  
義なし春の日はなかくいはん為也

みふのたゝみね

625 一ありあけのつれなくみえし別より暁はかりうきものはなし

別とはあはて帰心也暁はかりはあかつきほとゝ云也古今玄抄の  
哥と也

ありはらのもとかた

626 一あふことのなきさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりける  
異義なし伊勢物語の哥大淀の松はつらくもあらなくにうらみ  
てのみもかへる波かな下句同心也

よみ人しらす

627 一かねてより風にさきたつ浪なれや逢事なきにまたき立らん

さきたつなみとははやく名の立と云心也

たゝみね

628 一みちのくにありといふなるなと河なき名とりてはくるしかり

けり

義なし名とり川は奥州名取の郡あり人丸集みみ

みはるのありすけ

(\*)

【校異】\*一有輔 贈太政大臣長良一男、四位。冬嗣御孫、母従五位下雅渚女  
629 一あやなくてまたきなきなのたつたかはわたらてやまん物ならなく  
に

あやなくは無益也無名を歎にてはなき也わたらてやまんとはあ  
はてやむへきとはおもはぬにまたき名か立かうたてしきと也

もとかた

630 一人にいさ我はなき名のおしければむかしも今もしらすとをいはん  
義なし

よみ人しらす

631 一こりすまに又もなきなは立ぬへし人にくからぬよにしすまへは  
惣して人をにくしと思事なき身なれば人のなといはんをもし  
らぬ也いくこひも名は立へきと也

なりひらの朝臣

632 一人しれぬ我かよひちのせきもりはよひくことに打もねなむ  
事書みえたり大鏡二二条の後のみやつかひこそまつおほつか  
なれとあり

つらゆき

633 一しのふれとこひしき時は足引の山より月の出てこそくれ  
義なしいてこそくれは出て行と也

よみ人しらす

634 一こひくてまれにこよひそあふ坂のゆふつけ鳥はなかくもあらな  
ん  
相坂の鳥にあらすあふと云言付て也

をのこまち

635 一秋の夜もなのみなりけりあふといへはことそともなく明ぬるもの  
を

ことそともなくはその事となき事也

凡河内みつね

636 一なかしとも思そはてぬ昔よりあふ人からの秋のよなれば  
あふから源物人からとあるなり

よみ人しらす

637 一しのゝめのほからくとあけゆけはをのかきぬなるそかなしき  
ほからくはほからかに也朗ホカラカ也成そかなしきとは其時  
節の事也

【校異】ほからかに也\*

藤原国経朝臣

638 一あけぬとて今はの心つくからになといひしらぬ思そふらむ  
いひしらぬとは言語道断我もえしらぬ也

としゆきの朝臣

639 一あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ  
義なしこきたればかきたれて也ひたふりにふる也そをちつゝ也

640 一寵テウヲ用也一説ウツクト也

【校異】寵テウヲ用也一説ウツクト也\*

寵

640 一しのゝめの別をおしみ我そまつ鳥よりさきに鳴はしめつる  
義なし

よみ人しらす

641 一郭公ゆめかうつゝかあさ露のおきてわかれしあかつきの声  
同 起て別し可然也

同

642 一玉連<sup>クシケ</sup>あけは君かなたちぬへみよふかくこしを人みけんかも  
義なし夜ふかくこしとは夜來たるを人や見たると也立ぬへみは  
たちぬへしと也

大江千里

643 一けさはしもおきけん方もしらさりつ思いつるそきえてかなしき

霜也しもをやすめ詞のことく面白しと也霜に付ては朝は起ける  
方も（\*）

【校異】\*—しらぬと也

なりひらの朝臣

644 一ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成まさるかな

いやはかなにもは弥はかなきたのみと也

よみ人しらす

645 一君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

事書<sub>ニ</sub>あらは也みそかにとは密々也教長卿御説<sub>ニ</sub>恋の哥第一の  
哥と也

なりひらの朝臣

646 一かきくらす心のやみに迷にき夢うつゝとは世人さためよ

義なし当集<sub>ニ</sub>世人也

よみ人しらす

647 一むはたまのやみのうつゝはさたかなる夢にいくかもまさらさりけ

り

義なしいくらをいくかもともあり同心也やみのうつゝとはうつ  
ゝともなき契はよくみえたる夢にはいかほともまさらぬと也

同

648 一さ夜ふけてあまのとわたる月影にあかすも君あひみつるかな

義なし

同

649 一君か名もわかかなもたてし難波なるみつともいふなあひきともいは

し

義なしみつは難波の御津也

同

650 一名とり河せゝのむもれ木あらはれはいかにせよとか逢みそめけん

同（\*）

【校異】\*—此うたなき本有

651 一吉野河水の心ははやくとも瀧のをとにはたてしとそ思

同

同

652 一こひしくはしたにをおもへ紫のねすりの衣色にいつなゆめ

ねすりは紫根にて摺たる衣と御家説なり清輔卿奥義<sub>ニ</sub>は寝てす  
る衣と也後撰に堀川右大臣人しれてねたさもねたし紫の根すり  
の衣うはきにをせん返し泉式部ぬれ衣と人にはいはん紫のねす  
りの衣うはきなりとて紫は物にうつりやすき物なれば寝て摺た  
ると云心なり根と用給ふ也

注(2)

家々本<sub>ニ</sub>入哥

よみ人しらす

一いぬかみのとこの山なるなとり河いさとこたへよ我なもらすな  
返し うねめのたてまつれる

一やましなのをとほの瀧のをとにたに人のしりつゝ我恋めやも

をのゝはるかぜ

653 一花すゝきほにいてゝこひは名をおしみしたゆふひものむすほゝれ

つゝ

義なし

たちはなのきよきかしのひにあひしられる女のもとよりをこせ

たりける

よみ人しらす

【校異】たちはなのきよきかしのひにあひしられる女のもとよりをこせたりけ

る一\*

654 一思ふとちひとりくかこひしなはたれによそへてふち衣きむ

昔は朋友ホウユウにも凶服をきたる也おもふとちは夫婦也源氏物語ニ紫

の上ニ別ての時源氏君の言ニわかためにき給はゝ深く染んとあり  
夫のニは色ふかし婦のニはあさしと也

返し

たちはなのきよき

655 一なきこふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてらよるこそはきめ

義なしそをち也

こまち

656 一うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしき

義なしみるかわひしき

同

657 一かきりなきおもひのまゝによるもこん夢ちをさへに人はとかめし

同

同

658 一夢ちにはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめみしことはあ

らす

同 見しことはあらず

659 一おもふとも人めつゝみのたかければ河とみなからえこそわたらね

同

同

同

660 一たきつせのはやき心をなにかも人めつゝみのせきとゝむらん

同 切なる心也

注(3)

君か名もわか名もたてし難波なる

みつともいふるあひきともいはし

なきこふる涙に袖のそほちなは

ぬきかへかてらよるてそはきめ

しらかはのしらすともいゝしそこ清み

清てよるはすまんと思へは

むらくにのたちにしわかかな今更に

事なしふともしるしあらめや

きのともりの

661 一紅の色にはいてしかくれぬのしたにかよひて恋はしぬとも

同 色をいはん為ニ紅と云也

みつね

662 一冬の池にすむにほとりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな

同 序哥也

663 一さゝの葉にをくはつ霜のよをさむみしみはつくとも色にいてめやしみはつくともとはしみこほりたる事なり切なる心によせて

よみ人しらす

664 一山しなのをとほの山のをとにたに人のしるへくわかこひめかも義なし

きよはらのふかやふ

665 一みつ塩のなかれひるまを逢かたみゝるめのうらによるをこそまて塩のひると昼とを讀也

平貞文

666 一しらかはのしらすともいはしそこ清み流てよゝにすまんと思へはすまんとは契てすむへきと也

ともりのり

667 一したにのみこふれはくるし玉のをのたえてみたれん人なとかめそ義なし

同

668 一我こひをしのひかねては足曳の山たちはなの色にいてぬへし同 山橋は赤物也如此讀也

よみ人しらす

669 一おほかたはわかかなもみなとこきいてなんよをうみへたにみるめすくなし

みなとは皆の心也世をうみへたに一説用ゆへたに一説也海へたに也海辺也こゝにてもみるめすくなしと也海半とも沖渚とも也万葉あふみの海へたは人しるおきつ波君をよきてはしる人

もなし後撰なにせんへたのみるめをおもひせんおきの玉もをかつく身にして

平貞文

670 一枕より又しる人もなき恋を涙せきあへすもらしつる哉義なし

よみ人しらす

671 一風ふけは浪打岸の松なれやねにあらはれてなきぬへら也義なし

同

672 一池にすむなをゝしとりの水をあさみかくるとすれとあらはれにけり義なし名のおしきと也

同

673 一あふ事はたまのをはかりなのたつはよしの河のたきつせのこと同 その事也

同

674 一むら鳥のたちにしわかかな今更に事なしふともしるしあらめ事なしふともとは事なしかほをするともそのしるしあるましきと也古くはことなしひとも云也

同

675 一君によりわかかなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり君を思ふよりて也花に春かすみは花々しくたつと也霞の春たつことく我名かたつと也

伊勢

676 一しるといへは枕たにせてねしものをちりならぬな空にたつらん  
義なし

第十四 恋歌四

よみ人しらす

677 一みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人に恋やわたらん  
序哥也あさかの沼は菖蒲なきと云説あり実方陸奥守にて下向  
時端午あやめを被尋しになしとてこもを似せてふかれしと也  
こもをあやめに用ゆる心得へきと也殿上根合藤原高善あやめ  
草引手もたゆくなかき根のいかにあさかの沼におひけん負な  
らす金葉入也御物語六条右大臣の息皇后宮大夫信正と云人  
彼国任して下向時上洛して俊成卿物語実方以後出来歟あさ  
かのぬまにあやめありと也其時の物語むろのやしまさせる所  
にてもなししほかまの浦伊物わか君六十余国か内と云いつく  
はあれとしほかまのと云哥よまぬ身にてもせんかたなくおもし  
ろしとありしと也此人心のまゝ物かたりせしと也

678 一あひみすは恋しき事もなからましをとにそ人をきくへかりかる  
義なし

つらゆき

679 一いそのかみふるのなかみち中々にみすは恋しと思はましやは  
同 長道と一説不用さやの長山とも云事あり不用ふるとは布の  
釧を留事あり中道を用也

ふちはらのたゆき

680 一君といへは見まれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆる我恋  
（\*）義なり御家本はきみてへはとあり定家同心也  
【校異】\*—忠行 遠江守有定男

伊勢

681 一夢にたにみゆとは見えしあさなくわかおもかけにはつる身なれ  
は

よみ人しらす

682 一いしまゆく水のしら浪立帰りかくこそはみめあかすも有かな  
義なし石の間を行水はするくとはゆかてめくるとなればたち  
かへりとある也

同

683 一いせのあまのあさなゆふなにかつてふみるめ「マゴ」に人をあくよしも  
かな  
義なしかつくとはかいつ物とていそうをみるなどの事也

とものり

684 一春霞たなひく山のさくら花みれともあかぬ君にも有かな  
義なし序哥也

ふかやふ

685 一心をそわりなき物と思ぬるみるものからや恋しかるへき  
義なし見る物からやとはみることに恋しきと也

凡河内みつね

686 一かれはてむ後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

会者定離を云心也

よみ人しらす

687 一あすか河ふちはせになる世なりとも思そめてむ人は忘し

人は忘しとは誓言也

家々ニ本ニ入哥

そとをりひろか哥

我かせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

【校異】家々ニ本ニ入哥 そとをりひろか哥 我かせこかくへきよひなりさゝかに

のくものふるまひかねてしるしも\*

同

688 一おもふてふ事のはのみや秋をへて色もかはらぬ物には有らん

義なし思の不变なると也

同

689 一さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうちのはしひめ

宇治の橋姫事不審未決と也宇治の姫大明神とりくうと両神毎夜  
通給ふとあり或は住吉大明神通給ふとなり橋姫の物語と云物  
委みゆる也未見給ふと也橋は孝謙天皇の御宇にかゝる也右の  
事書ニは玉姫とある橋をその敷きて有かと也

【校異】の―橋 也―云々

同

690 一きみやこむ我やゆかんのいさよひにまきのいたともさゝすねにけり

義なしいさよひはやすらふ心也月は不知夜イサヨイと也

そせい法師

691 一今こむといひしはかりに長月の在明の月をまちいてつるかな

一夜の内ニ非すたのみて夜々をへてはや長月有明の頃ニ成たる  
と也

よみ人しらす

692 一月夜よし夜よしと人につれやはこてふにゝたりまたすしもあら

す

異義なし月夜もよきと也よしさらはなにてはなし吉也月よに  
あらず夜也

【校異】なし―なき也 吉―好

同

693 一君こすはねやへもいらしこむらさき我もとゆひに霜はをくとも

義なしもとゆひは紫のくみにてする也こ紫とはこまやかなる色也

【校異】こ紫とはこまやかなる色也―濃紫也

同

694 一宮木のゝもとあらのご萩露をゝもみ風をまつこと君をこそまで

義なし風をまつことくもとあらは若枝の萩也

同

695 一あな恋し今もみてしか山かつのかきほにさける山となてしこ

見てしかはかな也

同

696 一つのくにのなにはおもはす山しろのとはに逢みむ事をのみこそ  
なにはとは名もんニはなき也とはわにとよむ也ときはに也きを略  
也此なにはを大樹常徳院殿なにも思はぬと被仰し也異説也

つらゆき

697 一しきしまの山とにはあらぬ唐衣ころもへすして逢よしもかな



序哥也義なし

ふかやふ

698 一恋しとはたかなつけゝん事ならむしぬとそたゝにいふへかりける

義なし

家々本<sub>二</sub>入哥

つらゆき

【校異】家々本<sub>二</sub>入哥 つかゆき みちしらはつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひにすれ草  
みちしらはつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひにすれ草

てふこひにすれ草一\*

よみ人しらす

699 一みよしのゝおほかはのへの藤なみのなみにおもはゝわか恋めやは

義なし序哥也大河のへとは花も藤もある也なみ<sub>三</sub>思は人なみ也

同

700 一かくこひむ物とは我も思にき心のうらそまさしかりける

義なし

同

701 一あまのはらふみとゝろかしなる神も思ふ中をはさくる物かは

同 さくる物かはとよむ也

702 一梓弓ひきのゝつゝら末つゐにわか思人に事のしけゝん

こととしけゝんとは口舌のしけき也喧嘩と云も口舌也末つゐに

は後つゐ<sub>二</sub>也卿<sub>三</sub>撰<sub>レ</sub>無事<sub>二</sub>身<sub>三</sub>撰<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>事<sub>二</sub>引<sub>レ</sub>哥<sub>三</sub>我<sub>レ</sub>ゆ<sub>二</sub>へ<sub>三</sub>いたく

なわひそのちつゐにあはしとおもふ我ならなくに右<sub>二</sub>あめのみ

かとは天智の御事

【校異】此歌の心、たとへば思中のいかなる事かいでこんとあやぶみおもひしに、

末つゐに此人に事のしげゝんとは、よからぬ口舌いできにたりと云心也。

事しげしとは、諍論口舌を云ならはしたり。万葉、人ごとはしげみこち

たみ老が世にいまだわたらぬ朝河渡る。後撰、ことしげししははたて

れよひの間にをけらんつゆは出てはらはん、末つゐにとは、末に成て終

に思もし<sub>る</sub>事いできぬと云也。万葉十一、玉の緒をくゝりよせつゝ末遂

にゆきはわかれす同じ世にあらん、後つゐにいもにあはむと朝露の命は

いけりこひはしけれど、我故にいたくな託そ後終にあはじと思ひし我な

らなくに、高田の野べはふくずの末遂にちぢにわすれんわがおほきみか

も、後つゐに、末つゐに、唯同事也。此心にてこそ、返し、夏引の手

引の糸をくり返しことしげくともたゝんと思ふな、此歌も叶て聞ゆれ。

末の字は後説字也。孝経云、無撰言身無撰行

703 一夏引のてひきのいとをくり返し事しけくともたえむと思な

義なし口舌ありとも思たえしと也

704 一さと人の事は夏のゝしけくともかれ行君にあはさらめやは

ことは夏ののしけくともとは口舌にて中絶はするとも又あはん

と也さと人つねに云里人<sub>二</sub>あらず<sub>三</sub>児喝食の里と云もみやつかへ

人の里と云も都の事也今の内裏を里内裏と申も京中也世間の人

と云心也

[705] 一いままうてくとは只今まいらんと也

【校異】いま一\*

在原業平

705 一かすくにおもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされ

る

事書<sub>ニ</sub>みゆ心中の深淺はとひかたきと也身を<sub>ニ</sub>しる雨は涙也

よみ人しらす

706 一おほぬさのひくてあまたに成ぬれば思へと多こそたのまさりけれ

事書に<sub>ニ</sub>みゆ

【校異】みゆ―みえたり

なりひらの朝臣

707 一おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふ物を  
返し義なし

よみ人しらす

708 一すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり

義なし

同

709 一玉かつらはふきあまたに成ぬればたえぬ心のうれしけもなし

同 草かつら也玉とはほめたる言也たえぬ心のは我にはたえね

ともうれしくはなきと思へと多こそその同心なり

同

710 一たかりによかれをしてか郭公たゝこゝにしもねたる声する

そへたる哥也義なし

同

711 一いて人は事のみそよき月草のうつし心はいろことにして

世俗<sub>ニ</sub>云いてと同心也ことのみそよきは言と心と相違あると也

うつし心は現<sub>ケ</sub>心<sub>ニ</sub>是は定心<sub>ニ</sub>なきと也

同

712 一いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことの葉うれしからま

し

義なし

713 一いつはりと思物から今更にたかまことをか我はたのまむ

同 物からはゆへ也

同

素性法師

714 一秋風に山の木葉のうつろへは人の心もいかゝとそ思

同

ともりの

715 一蟬のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは

同 序哥也

よみ人しらす

716 一空蟬のよの人ことのしけゝれはわすれぬものゝかれぬへら也

物いひさかなきによりてもしやかれんと也

同

717 一あかてこそ思はん中ははなれなめそをたに後の忘かたみに

義なし

同

718 一わすれなんと思心のつくからにありしよりけにまつそかなしき

同 忘なんとよみ切てと思心とよむ也

同

719 一忘なん我をうらむな郭公人の秋にはあはんともせず

人の秋にはとは人のあくにはあふましき也

同

720 一たえすゆくあすかの河のよとみなは心あるとや人のおもはん

義なしよと見なほとは心のよとかならばよそ心やあるとおもは  
んと也右<sup>ナカトシラ</sup>中<sup>シラ</sup>臣<sup>シラ</sup>東人<sup>シラ</sup> 仮名也

【校異】右中臣東人—\* 仮名也—\*

同

721 一よと河のよとむと人はみるらめと流てふかき心あるものを

義なし

そせい法師

722 一そこひなきふちやはさく山河のあさきせにこそあた浪はたて

義なしあた浪はあた名也

よみ人しらす

723 一紅のはつ花そめのいろふかく思しこゝろ我わすれめや

義なし

かはら左大臣

724 一みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれんと思我ならなくに

義なし

よみ人しらす

725 一思ふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる

思に猶過て也 同

【校異】過て—返て

同

726 一ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心も秋のもみちならねは

心の万<sup>ニ</sup>うつるもえしらぬ也我心かもみちならはこそ色のいろ

く<sup>ニ</sup>にうつるふしらんと也

【校異】万<sup>ニ</sup>うつる—移<sup>方</sup> 色の—\*

小野小町

727 一あまのすむさとのしるへにあらなくに 怨<sup>ウラミ</sup> むとのみ人のいふら  
ん

義なし

しもつけのをむね

728 一くもり日の影としなれる我なれはめにこそみえね身をはなれす

くもりたる日も物の影はみゆる也目<sup>ニ</sup>こそ見えねとは凡見<sup>ホシクシ</sup>にて

みぬまで也影はなれぬと也

つらゆき

729 一色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに

義なし

よみ人しらす

730 一めつらしき人を見むとやしかもせぬ我下ひものとけわたるらむ

義なししかもせぬは然も也さやうにもせぬ也人のこふる時おひ

のとくる事あり

同

731 一かけるふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖そぬれぬる

義なしふる人いはんために春雨と云也春雨のつれくによりて

あれは也ふる人はふるさるゝ人也蜻蛉<sup>カケロウ</sup>テン外ノ遊糸アルト

キハイウフ也

【校異】イウフ—蜉蝣

同

732 一ほりえこくたなゝしを船こきかへりおなし人にや恋わたりなん

義なしたなゝし小舟とは舟<sup>ナナ</sup>棚<sup>ナナ</sup>ある也小船<sup>ニ</sup>はなき也ほり江は

ほりたる所也

伊勢

733 一わたつみとあれにしとこを今更にはらは袖やあはとうきなん

義なしあれにしいはん為わたつみと云也あわとうきなんとは涙の水によせて也

【校異】也―なめり

つらゆき

734 一いにしへに猶立帰るころかなこひしきことに物わすれせて

義なし恋しきことにとよむ也

大伴くろぬし

735 一思いてこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

事書に見えたり

典侍藤原よるかの朝臣

736 一たのめこしことのはいまはかへしてむ我身ふるれはをき所なし

事書みゆ我身ふるれとは身のふりたるにをき所なきを文をも云也

[737] 一返し近院右大臣也能有文徳ノ源氏右大臣左大将也

【校異】返し―\* 右大臣也―\*

近院の右のおほいまうちきみ

737 一今はとてかへすことのはひろひをきてをのか物からかたみとやみん

義なし

よるかの朝臣

せそて道にまよひありきて我かといひてあはんと也 梓ハコイ本

738 一玉梓の道はつねにもまとはなん人とふとも我かと思はむ

同人をとふとも我せんと也せめての事也

【校異】せそて道にまよひありきて我かといひてあはんと也 梓ハコイ本―\*

よみ人しらす

739 一までといはねてもゆかなんしゐてゆくこまのあしおれまへのた

なはし

義なし

[740] 一中納言昇の朝臣は延喜八年二月中納言九年民部卿十四年大納言

【校異】中納言昇の朝臣は―のぼる

[740] 一閑院 女房也 源のつきかけの女也昇か女也

閑院

740 一相坂のゆふつけとりにはあらはこそ君かゆきをなくもみめ

義なし

伊勢

741 一ふるさとにあらぬ物からわかたために人の心のあれて見ゆらむ

同

寵

742 一山かつのかきほにはへるあをつら人はくれとも事つてもなし

山さとに住にてなしつらよせて人はくれともと詠也

さかいのひとさね

743 一おほそらは恋しき人のかたみかは物思ことになかめらるらん

義なし (\* )

【校異】\*―酒井人真、左中央、河内国人也

よみ人しらす

744 一あふまてのかたみも我はなにせんに見ても心のなくさまなくに

おきかせ

745 一あふまてのかたみとてとゝめけめ涙にうかふもくつ成けり

同 我とゝむるにあらす其方<sup>ニ</sup>のこし給と也もくつは女房のも  
をよせてなり

よみ人しらす

あすかい家はあたを用は事書<sup>ニ</sup>も

746 一かた見こそ今はあたなれこれなくはわするゝ時もあらまし物を

定家卿はあたを用給ふと見えたり何もよき説也

義なしあたなれあたをもすてすあたは哥の本意たつ也定家卿時  
分院の殿上の哥合<sup>ニ</sup>講師のあたとよむを傍の人の吠<sup>【吠】</sup>ければ定  
家卿同心也たゝことはのよきにつくへき也

【校異】あすかい家はあたを用は事書<sup>ニ</sup>もー\* 定家卿はあたを用給ふと見え  
たり何もよき説也ー\* あたをもーあだなれとも 吠ーわらひ

## 注

(1) 泉紀子「飛鳥井家の古今集注釈―『蓮心院殿古今集註』から『榮雅抄』へ

―』《国語国文》五二号、昭和五八年三月)

(2) 二五丁表にみられる貼り紙で、本文と同筆の墨書である。他本には見られ  
ない。

(3) 二五丁、二六丁間に挟まれた一紙。(2)と同様、本文と同筆で、他本には  
ない。

※本稿をなすにあたり、資料の閲覧及び翻刻の許可を戴いた京都府立総合資料館  
に深謝申し上げます。

(ひだか あいこ・本学大学院博士後期課程)